

親の価値意識と子育て

後藤 ヨシ子*

(2001年3月15日受理)

Value Consciousness of Parents and Child Care

Yoshiko GOTO

(Received, March 15, 2001)

はじめに

現在社会の変化のテンポは極めて速く、かつての何十年間の変化より、今日の1～2年間の変化の方がはるかに著しいという例もめずらしいことではない。しかし教育・育児においては、どんなに社会が変化しようとも時代を越えて変わらない価値のあるもの(不易)があると考えられる。しかしまた同時に社会の変化とともに変えていく必要があるもの(流行)に、柔軟に対応していくことも、一方大事な事柄でもある。価値観、価値意識は、人間とその生活にとって、何を望ましいものとし、何を望ましくないものと見なすかといった観念である。家庭においては基本的な社会化がおこなわれるが、その過程において親(保育者)は、日々の育児行動において、子どもに大事な一定の価値観、文化を伝達していると考えられる。いわゆる人間にとって、また人生において、何が大事であるかを意識すると否とにかかわらず子どもに伝えている。というより親のもっている価値意識が親の知らない間に子どもによって学びとられるという事であるかもしれない。

そこで今回は、現在価値観の多様化・流動化する中、幼児をもつ親は、どのような価値意識をもち、子どもの社会化や育児にかかわっているか、大学生の価値意識の資料を含め考察した。

研究方法

対象は、長崎市内幼稚園3～5歳児をもつ保護者(母親)326名、長崎大学教育学部3年次生252名(男子学生74名、女子学生178名)。調査実施時期は平成11年7月～10月である。

調査内容は、保護者に対しては「育児の中で、親が子どもに伝えたい事や、身につけさせたい事柄、特に生きていく上で、また人間にとって大事だと思う事柄や、心の糧にしていることを教えて下さい(諺でもよいです)(簡単な言葉で、いくつでもよいです)」と自由に記述をしていただいた。大学生に対しては「将来、親の立場になったとき、子育ての中で、子どもに伝えたい、あるいは身につけさせたいと思う価値観(人間にとって、また

*長崎大学教育学部家政教育講座

人生にとって大事と考える事柄)は何ですか(諺でもよいです)(簡単な言葉で、いくつでもよいです)。」と、保護者と同様に自由記述にて回答を得た。資料の集計には、糸山・藤木の考案した連想用集計ソフトを用いた。親あるいは大学生が価値ある事柄と考えている言葉や諺での自由記述内容を個人別にすべての文言をパソコンに入力し集計した。同時に記述内容に関して、今回は以下の通り13のカテゴリーに分類をした。

1. 愛・自己肯定に関する事柄

例えば、愛情、愛すること、愛されること、自分を愛すること、自分を好きになる、自分を信じること、望まれて生まれたこと、人を思いやること、思いやり、やさしさ、等、心の温かみに関する事柄や自分の存在に関する自己受容、自己肯定に関する事柄を含む。

2. 性格・行動に関する事柄

例えば、明るい心、快活、素直、たくましい、心の強さ、積極性、我慢強さ、等を含む。

3. 人間関係に関する事柄

例えば、友達関係に関して(友達と仲良く、友達をつくる、友達を大切に、たくさんの友達をつくる)、兄弟に関して(兄弟仲良く、兄弟姉妹の大切さ)、親子関係・祖父母に関して(親子の絆、親子コミュニケーション、何でも親に話す、親への感謝、祖父母を大事に)、他者との関係・他者理解に関して(人との信頼関係、相手の気持ちを考える、相手の立場に立つ、相手の身になって行動する、人の痛みがわかる、人の話はよく聞く、人の嫌なことはしない)、等を含む。

4. 健康に関する事柄

例えば、健康である、健康なからだをつくる、体力をつける、心身の健康、元気に過ごす、等を含む。

5. 礼儀・あいさつに関する事柄

例えば、礼儀作法、礼儀正しく、あいさつをする、言葉遣い、食事作法、等を含む。

6. 社会規則・道徳に関する事柄

例えば、善悪の判断、社会のルール、交通ルール、人に迷惑をかけない、道徳心、等を含む。

7. 基本的生活習慣の自立に関する事柄

例えば、基本的生活習慣、しつけ、整理整頓、あとかたづけ、自分の事は自分でする等を含む。

8. 生命に関する事柄

例えば、命の尊さ、生命の大切さ、等を含む。

9. 生き方・人生観に関する事柄(諺や教訓も含む)

例えば、夢をもつ、夢に向かって頑張る、チャレンジ精神、プラス思考、失敗は成功のもと、継続は力なり、時は金なり、全力をつくす、有言実行、苦あれば楽あり、七転び八起、人生山あり谷あり、等を含む。

10. 自己の確立・自己実現に関する事柄

例えば、意志の主張、意思表示ができる、自分の意思をもつ、自分の考えをもつ、自分の意見をしっかりとつ、自分らしさ、自己実現、等を含む。

11. 自然・環境に関する事柄

例えば、自然との触れあい、環境への関心、地球環境、等を含む。

12. 遊び・学習に関する事柄

例えば、元気に遊ぶ、遊びをたくさんさせる、よく遊びよく学ぶ、学習の必要性、学習意欲、知的能力、学力、思考力、等を含む。

13. 特にない

研究結果

1. 幼児をもつ母親の価値意識の内容

幼児をもつ母親が人間にとって、また人生にとって価値ある事柄として、子どもに伝えたいと思う内容について、その割合の高い順に上位6位までに番号を記している。全体的に、第1位は「愛、自己肯定」に関する事柄(66.0%)であった。ほぼ7割の母親が、どのような社会や時代においても価値あることと思うことは、人間にとって愛情と信頼を基本とする思いやりや自己存在への信頼感情に関する内容であった。第2位は「人間関係」に関する事柄(42.9%)である。今日少子社会の中、人間関係の薄さが懸念され、現在社会におけるストレスの大きな要因ともなっている仲間との関係や親子コミュニケーション、他者理解に対する内容が示されていた。第3位は「性格・行動」に関する事柄(32.8%)であり、子どもの人格形成の要素として大事な内容と親は考えていることがわかる。ついで第4位に「社会規則」、第5位に「礼儀・あいさつ」、第6位に「基本的生活習慣」と続いており、社会のルールや生活習慣の自立の形成が幼児期には大事な発達課題であることとの関連がみられた。他方 幼児にとっての遊びは生活そのものであり、また遊びのもつ意義は幼児期においては大事な要因と考えがちであるが、価値意識における順位は低く「遊び・学習意欲」に占める割合はわずか8%にすぎなかった。また人間にとって大事と考える事柄は「特にない」という母親が6.4%いた。

表1 幼児をもつ親の価値意識(性別) (%) (複数回答)

	男 児	女 児	計
1. 愛	104(64.6) ①	111(67.3) ①	215(66.0) ①
2. 性格・行動	56(34.8) ③	51(30.9) ④	107(32.8) ③
3. 人間関係	74(46.0) ②	66(40.0) ②	140(42.9) ②
4. 健康	9(5.6)	9(5.5)	18(0.3)
5. 礼儀・挨拶	45(28.0) ⑤	52(31.5) ③	97(29.8) ⑤
6. 社会規則	51(31.7) ④	51(30.9) ④	102(31.3) ④
7. 生活習慣	42(26.1) ⑥	27(16.4)	69(21.2) ⑥
8. 生命	13(8.0)	14(8.5)	27(8.3)
9. 生き方	26(16.1)	32(19.4) ⑥	58(17.8)
10. 自己確立	11(6.8)	23(13.9)	34(10.4)
11. 自然・環境	2(1.2)	6(3.6)	8(2.5)
12. 遊び・学習意欲	16(9.9)	10(6.1)	26(8.0)
13. 特にない	8(5.0)	13(7.9)	21(6.4)
反応語総数(平均)	457(2.8)	465(2.8)	922(2.8)
人 数	161	165	326

なお子どもの性別の違いによって親が考える価値内容は、上位1～2位は共通であったが、上位3位において、男児をもつ母親は「性格・行動」をあげ、他方女児をもつ母親は「礼儀・挨拶」をあげていた。また第6位においても男児をもつ母親は「基本的生活習慣」を、他方女児をもつ母親は「生き方」を価値とする考えを示されており、子どもの性別による若干の相違がみられた(表1)。

2. 大学生の考える価値意識の内容

「将来親の立場になった時」という前提のもとに自由記述にて回答をえた。大学生の考える価値意識の内容について、その割合の高い順に上位6位までの番号を記している。全体的には、上位第1位、2位ともに幼児をもつ母親と共通した「愛、自己肯定」(82.9%)、そして「人間関係」(79.0%)に関する事柄であった。子育ての体験や世代間の相違はあるにしろ、人間にとって価値ある事柄と考える内容は共通であることが示されていた。中でも女子学生の「愛・自己肯定」に関しては、9割の学生が、そして「人間関係」においても親の4割に対し、8割の大学生が人間関係が大事であることの認識をしめしていた。価値意識に関する反応語の総数は、大学生の方がより多く平均4.1個、中でも女子学生(4.4個)の方が男子学生(3.4個)よりも多い。他方幼児をもつ母親は2.8個であった。

表2 大学生の価値意識(性別) (%) (複数回答)

	男子	女子	計
1. 愛	46(62.2) ①	163(91.6) ①	209(82.9) ①
2. 性格・行動	25(33.8) ⑤	109(61.2) ④	134(53.2) ④
3. 人間関係	44(59.5) ③	155(87.1) ②	199(79.0) ②
4. 健康	5(6.8)	16(9.0)	21(8.3)
5. 礼儀・挨拶	10(13.5)	32(18.0)	42(16.7)
6. 社会規則	21(28.4) ⑥	42(23.6)	63(25.0)
7. 生活習慣	3(4.0)	8(4.5)	11(4.4)
8. 生命	4(5.4)	6(3.4)	10(4.0)
9. 生き方	46(62.2) ①	125(70.2) ③	171(67.9) ③
10. 自己確立	17(23.0)	62(34.8) ⑤	79(31.3) ⑥
11. 自然・環境	4(5.4)	5(2.8)	9(3.6)
12. 遊び・学習意欲	26(35.1) ④	57(32.0) ⑥	82(32.5) ⑤
13. 特にない	1(1.3)	0	1(0.4)
反応語総数(平均)	252(3.4)	780(4.4)	1,032(4.1)
人数	74	178	252

表3 幼児をもつ親と大学生の価値意識 (%) (複数回答)

	幼児の親	大 学 生
1. 愛	215(66.0) ①	209(82.9) ①
2. 性格・行動	107(32.8) ③	134(53.2) ④
3. 人間関係	140(42.9) ②	199(79.0) ②
4. 健 康	18(0.3)	21(8.3)
5. 礼儀・挨拶	97(29.8) ⑤	42(16.7)
6. 社会規則	102(31.3) ④	63(25.0)
7. 生活習慣	69(21.2) ⑥	11(4.4)
8. 生 命	27(8.3)	10(4.0)
9. 生 き 方	58(17.8)	171(67.9) ③
10. 自己確立	34(10.4)	79(31.3) ⑥
11. 自然・環境	8(2.5)	9(3.6)
12. 遊び・学習意欲	26(8.0)	82(32.5) ⑤
13. 特 に ない	21(6.4)	1(0.4)
反応語総数(平均)	922(2.8)	1,032(4.1)
人 数	326	252

さらに幼児をもつ母親との相違は、大学生が現実には直面している「生き方」に関する事柄が、どちらかといえば男子学生に、また「自己確立・自己実現」に関する事柄は女子学生により上位の順位にあり、しかもこれらの内容は、青年期の発達課題とも大きく関連している事柄であった。また「遊び、学習意欲」に関する事柄が、第5位に示されていることも、大学生にとって現実的な事柄として学習への取り組み・達成行動は、心の中に大きく受けとめられ価値ある事柄と考えられていることが伺えた(表2, 3)。

おわりに

人間にとって、また人生において何を価値ある事柄と考えるかは、世代間の相違においてその内容にも相違が生じることが当然考えられる。人間の本質そのものは変わらなくても時代やとりまく生活環境が変わればそこに生きる人間の物事の受けとめ方、考え方、行動の起こし方も変わってくる。世代間の乖離がおきることも当然といえる。また親子間の常識や価値意識の乖離も、今日の親子関係のあり方を考える上での大きな課題としてあることも事実である。今回は幼児をもつ母親を対象に、子育て中の親の立場と、そうでない大学生の立場にいるものとの価値意識の内容について比較を試みたが、育児の経験の有無や世代の違いはあっても上位1位「愛・自己肯定」、2位「人間関係」においては、共に同じく共通した価値内容であった。人生経験や世代を越えて人間にとって価値と考える内容においては共通に指摘できるものがあること、そして一方では「幼児」および「青年期」といった各発達段階において、現実には直面している発達課題とも強く関連があることが浮き彫りにされた。

親の価値意識は子どもに何を期待するか、子どもへの期待像、親自身の人生観、人間観

とも深い関連があると考えている。さらに親のもつ価値意識が日々の子育ての中で、実際にどのように子どもに伝えられているかという課題もある。

価値観の多様性・流動化がいわれる中、親（保育者）は子育てを通して、まずは子どもに大事な価値観を伝達しているという視点、自覚をもって行動することが必要であると考ええる。今後カテゴリーの分類についてさらに異なる視点から検討を加える等、考察を深めていきたいと考えている。

文献

- 1) 山村賢明: 多様化・流動化する価値観と子どもの教育 児童心理, 36巻6号, 32-42, 1982
- 2) 糸山景大ら: 教科教育学研究のモデル化と授業設計理論 教科教育学研究第14集, 71-86, 第一法規, 1996
- 3) 岩井勇児: 揺れ動く親の子育て 児童心理 36巻6号 133-139, 1982
- 4) 竹内 清: 核家族時代と子どもの教育 児童心理, 36巻6号, 126-132, 1982
- 5) 山極 隆: 不易と流行をどう考えるか「総合的な学習の実践」 教育開発研究所 28-29, 1997